

# 「好きな町で仕事を創る」

広石拓司

NPO法人ETIC. (エティック) フェロー



## 略歴

東京大学大学院薬学系修士課程修了。三和総合研究所（現三菱UFJリサーチ&コンサルティング）入社後、1996年より「よりよい市民社会の実現に向けた市民と企業・行政とのコミュニケーション」をテーマに、EDISON（市民生活室）を立ち上げる。2002年よりNPO法人ETIC.の活動に参画。日本初のソーシャルベンチャープランコンテスト「STYLE」のブラッシュアップメンター、書籍『好きなまちで仕事を創る～Address the Smile～』編集長、チャレンジ・コミュニティ創成プロジェクトのチャレンジ・プロデューサー強化ディレクターなどを務める。

## チャレンジをプロデュースする

ETIC.では、「チャレンジ・コミュニティ」と称して、新しいことに挑戦したいと考える若者に対して、日本の各地でその挑戦機会を創り出し、応援する事業を行っていますね。

地域を元気にするにはプロデューサーが必要と言われることがあります。けれども、これまで若者のチャレンジを「プロデュース」するということはあまり行われてきませんでした。言い換えれば、地域というのは若者に対して、意外に閉じているんじゃないかと思うんです。若い人が何かチャレンジしようと思っても、それができる場も機会もない。だから彼らは自分が貢献できる部分も分からない。真剣に若者たちに向き合おうとコミットする人もいない。そこで、ちゃんと若者の挑戦機会を設計すると同時に、チャレンジした人が成長できるようにサポートして、成果を積み上げていかないとコミュニティというのは変わっていかないと考え、始まった事業が「チャレンジ・コミュニティ」です。

これまでの日本では、リーダーを期待する論が強かった。突如、自分なりのデザインを持っているリーダーが現れてパッと地域を変えてくれる、または大きな企業が進出して地域を再生してくれる、というように思いがちだったわけです。しかし、そうした形では結局地力がつかないし、変化も本質的には起きないと思うんです。例えば有名な首長が出てきて地域が大きく変わったように見えても、その人が辞めた瞬間に元に戻ってしまうというのはよく聞く話です。

重要なのは、いかに地域の底力をつけるかであって、そのためにはやはりリーダーではなくてプロデューサー、つまり、前に出て引っ張っていくのではなくて、後ろから後押しするような人が必要だろうというのが、一番強く感じているところです。

## 明治維新の体質を変える

大切なことは日本が19世紀的な明治維新の体質を早く変えていくことだと思うんです。当時、維新を起こした人たちは

非常にエネルギー的な人たちで、これを前提に、欧米列強に対抗するために制度をがっちり作って、しかも、元々あまり豊かではない国が資源を集約して戦うために、東京を中心としたシステムを作っていた。

でも結局、その時代に作られた制度だけが残ってしまった。個人というのは制度がある中で生まれると、どうしてもその制度を前提に生きていくことになってしまいます。パワフルな個人が前提の社会であった明治維新前後に比べ、今の若者たちは制度があることを前提として生まれてきたわけです。先日私を訪ねてきたある学生が、「リクナビに載ってないからその会社には就職できません」というんですね。自分の行きたい会社があるんだけど、就職情報ページに募集がないから就職できないと。前提として制度があって、それに乘ることができなければ先には動けない、そんな考え方をする個人が多くなってきていると思います。

それともう一つは、日本が非常に豊かになった。例えばいま地方が貧しい、と言っても、飢餓の状況に陥っているわけではないし、地域が沈んでいると言っている町の会議の参加者は高級車に乗っていたりする。要は明治維新の時のように、無理やり東京に集約させなくても実は地域は十分戦えるんですね。我々は開かれた自律地域、自律社会、と言っていますが、地域はもっと自立して、グローバルな中に地域を位置付ける方向にシフトしていく必要があると思います。

Jリーグ、アルビレックス新潟の池田会長は「新潟の人口はシンガポールと同じ。シンガポールではIT博士を2,000人出そうというプランがあるのに、新潟ではそんな話を全然聞かない、おかしい」と言うんですね。そういう発想があってもいいと思います。

## 「好きな町」を軸に持つ

ETIC.では、『好きなまちで仕事を創る』という本を出版されましたね。その背景、広石さんのお考えなどを教えてください。

私自身は以前、三和総研の市民生活室というところで市民視点重視の企業活動のコンサルティングなどを行っていました。入社したのが94年でしたから、ちょうど社会の変わり目でしたよね。当初病院経営にかかわったのですが、厚生省が保険点数をちょっと触るだけで病院の経営はいくらでもひっくり返せるという現実を目の当たりにしました。病院や診療所をはじめ、病院経営コンサルタント、医療関連サービスなど医療の業界全体が厚生省の動向に依存している。どこにも「患者」という言葉が出てこないわけです。

そんななか、福祉などの調査で海外に行ってみると、自分たちの手で自分たちの問題を解決しようというマインドを持っている人の多さに気がきました。市民発で制度の変更にまで影響を与えたり、自分たちで福祉事業を行ったり。どうしてそんなマインドが持てるのだろう、と考えたときに、おそらく彼らは自分の中に軸というものを持ってんじゃないかと考えました。そして、その軸に基準を合わせて仕事を創っているわけです。日本人が市民社会というのを意識できないのは、この「軸」を意識できていないという事情もあると思うんです。

今の日本は、制度という枠組みが外にあって、その枠組みに対して自分がどう入っていくのか、というところがテーマになりがちです。今回、ETICが出版した『好きなまちで仕事を創る』は、地域に密着してチャレンジする社会起業家の事例を集めたものですが、好きな町という、「好き」から入れば必然的に制度ではなく、「自分が選んだ」ということが前提になると思うんです。やりたいからやる。そこを忘れたら、たぶん個人から始まる仕事は生まれませんよね。そこがすごく大切なことだと思うんです。もちろん枠組みも個人の力を増幅するためには非常に重要なことですが、前提がまず自分の中にあるということがすごく大切なことです。好きなまちで仕事を創ることによって、その前提ができる気がします。

自分の生まれた町、好きな町というのを一つの軸と考えれば、コミットメントしているという実感を持てますよね。そうすることで、個人が元気になり、一方、地域も元気になる、グローバルな中で生きていける、自律地域にシフトしていけるのではないかと考えています。

### 『好きなまちで仕事を創る』

NPO法人ETIC 編  
TOブックス刊  
1,260円（税込み）



### 地域と人をつなぐ

チャレンジ・コミュニティでは、地域での長期実践型インターンの機会づくりをしています。その意味は「地域の資源を最編集できる」ということにあると思っています。つまり、インターンによって、それまでなかったつながりを作ることができる。通常、例えばいきなり会津の寮元に飛び込んで住み込みで働くというようなことができるかといえば、そう簡単にはいかないですね。いいなあと思っても、つながりがないから、いきなりは難しい。

そこに、僕らはチャレンジ・プロデューサーと呼んでいますが、地域にインターンをコーディネートする人間がいれば、寮元と学生の間にインターンシップと一緒に働くという関係性を作っていくことができます。そうするとその学生を通じてまた違う人とつながったり、その受け入れ先を通じて地域の人とつながったりという新しい展開が見られるわけですよ。ハブとハブをつなぎ直して、新しいつながりを作る。言い換えると、新しいソーシャル・キャピタルが生まれるというのが、この事業のすごく面白いところだと思っています。

こういう関係性の再編集はソーシャル・デザインの基盤になっていきます。そして、全国各地にこうしたプロデューサーが生まれて、彼らのネットワークができると、地域と地域の新たなつながりができる。東京中心ではない、地域発の新たな社会づくりができるんじゃないかと思っています。

iPodには“Designed in California”って書いてある。“made in USA”ではないんです。そんな発想ができるような地域になればいいですね。

今、自分の住んでいる地域を自信を持って語ることができる人は少ないですね。そんな魅力を語れる地域と人が増え、さらに地域同士が連携し合えば、日本全体を巻き込んで社会が元気になっていきますよね。本日はありがとうございました。